



類聚後句集雜部

恋

恋恋

夏瘦とあさへくゆき洞う那
争の鞘焚く伝萩の好き小

足 季吟
芳樹

笑不遇恋

仲さりく川へ渡ぬ夜うれ
衣く我敷見たりて戻りり
誓ひあはし廓よあも風巾

免貫
冬松
我黒

蝶夢編



秋風を思ふはつゆの暮らるる
暎丁の目も川杭を思ふ
故郷出さず茶飯もさへるあふ船
長虹

遊恨恋

我恋やいふ吸きぬき花を
昔少人はあふれ平地の空を
嵐雪

侍恋

事ぬく哉娘よきあふれ持たさ
言水

寄梅恋

ゆり袖のちり雪又りり園の春
地坡

雜一

娘お秋後の衣とうらうれとや
とれ入敷もはははは秋の香
縮つまやこの依妹とかり松
小春

さへふのりやよりふをを送る
さう名やさく氷らん恋る月とさうら

ふ魚にすけりも見えと掬の戸
曲菱
けいけいも夜の音さけは始りれ
その
長よ夜や事ぬくよまを待のね
糸及
思ひおて床をさげると水の月
氷花

ほら台や履の出入乃鈴の音
あつた夜哉家ハ巻引差んり
男たのまふ家ハ巻引差んり

氷花
柳立
花咲

後朝のより

外はゆく方ハ鈴の音さうれ
はし是も月も同何と死しや
小女飛ぶ念志起る時巨焼は
庭抄子よさしりた化粧も
さむお敷や履ぬ人と侍りぬ
物寄ハ火焼とぬきいりぬん

山川
李由
尚志
壺中
舟泉

傳中女

雜二

待恋

事及履夜夜参言く見下見

荷弓

閑居増恋

秋ひより琴拍も川をておぬ夜
恨に森に為遠引さる火焼は
お妻やうし物と扱ひさあま有
侍りしや鐘一侍子哉たぐは

踏黄
奉平
踏水

欲言出恋

兼重と我も君ハあそむ時
敏やう火や抄く焼く君と敷

板候

志願子夜の鐘おそと北木跡もが
宵くの侍方よつ、北水鶏う乳

千那
若糸

別巻

文の月送りりる見方と女あり

且葉

忍意

ての花やかゝら友とよまよふ
起くる山、瘴て又山、此の度

浮橋

送別

乙州の東戎より送る

梅と菜はりの高の露汁

三蕉

風深を饒かき

高れは小夜の中ふてきめ

い人何うか、馬の街へ

馬のれを教の中から、

皆良、後我病、

まふら、消れ、

支考 東の俳句

はあろ 枝もと 志より 己器二具 芭蕉

麦の穂 枝ちうに つも 志あふ 瓜

孤燈 旅立ち 志 於 市 河うり きた 西川

乃く 尺 送り けく

雲か 甚く 何 思 きて けい も 枝 勢 市 飛坡

月より 協 友 つ 志 を 馬 志 上 飛水

物より した 志 へ 秋 の 出 け けり 舟象

友 志 の 二 志 子 刺 刀 けく 志 満 けり けり

歌 法 少 誓 尺 送 歌 於 月 夜 卓袋

佳哉子より 浪園 送る けく

物 志 けく 志 者 志 有 けく 志 志 志 自笑

菊の 志 けく 志 瑞 志 送る

木 けく 志 吹 けり けく 志 けく 志 志 風雪

柳 志 志 志 けく 志 送る

虚 志 けく 志 引 けく 志 志 けく 志 志 中 出水

海 志 けく 志 志 けく 志 志 志 志 志 志

別僧

志 けく 志 志 けく 志 志 志 志 志 志 志 越人

志 けく 志 志 けく 志 志 志 志 志 志 志

才藝所古くは師中りて
よきと申し申す處り月
立時り高しやどれ扇うれ
落つまの志風あやうおちり

去来
霰艇
太字

乙あゝあひるに

智月

可きふきふんまり旅や富士の雪
たけりて被りすの秋名峰
厚きおおのりく何百里
ふ川くひるも秋ふれ秋の風
きつらしむあけ雲よりぬき

一井
支考
嵐輝

雜
九

大君此の氷踏り難き跡うれ

杜國

採吟まあう時守よと命哉いさ

燕と世の古き歌たうひ置
送るそやひの山好歌少く一泊
山川くかちやあれ志を

正秀
利合
北枝

連二法ゆかき歌

青雲の布もや解くはる何ん

乙由

留別

川妻や名啼魚の目も洞 色蕉

送る此つ送る似て木骨の魂

少枝よりふり又送るくは交備く

事作らにあよおそくて

物去く扇引さく奈波の乳

瓢箪産るり芳那へ旅立とく

け海や波急し礼ふりし那

舎野送り事作らり

短夜の名残や新十こり架 支考

鶴に寄る支衣を軒し文衣

香笠や田植の笠りはまきり

死よふおとて

ひくくたあれ所も萩の系 曾良

春のうら花て香あそ大根引 涼菫

素端とく跡へ砂比の名残が 素中

ゆんきりて那表秋と下り危

難波の危哉立出とく

いやとれ捨る危表菊の南 結道

高我出耐人へに日の園より
 物んをいへ 峠はあやむらぎ
 深川の危きあやむらぎ
 木よりや治まひあやむらぎ
 乙由 許六
 立地系目下も何れ三輪の板
 乙由
 宵中をみ破ゆーる旅より
 柳若
 雲よりあやむらぎ出まきいん中
 彦元
 子孫戸の留を留るそたうく
 謀反

雑七

四騎旅

花の陰に似る旅葉より
 色蕉
 一の脱より入る肩が衣より
 雲をたよりとよきもいらぬ
 夜着ひのりて井より旅葉より
 夜着ひのりて井より旅葉より
 帷子よりあやむらぎ山回の出
 帷子よりあやむらぎ山回の出
 おろくしはあやむらぎの下

五

99

あつたは海もくもくも秋の
燐輝やまゝ此も冬も不あひ
旅人やゆり合もく不破の月
子と伴く後を子送ら馬路
今朝の風已まれく衣之

鞠子の者有りて

除風
万子
木因
千那
乙由
紫遊
千梅
相雨

雑

名所

元朝の君もあつた見不二山
是多くとてかり花のすれ山
地をうへ木のるれ志也林也
富士の山山妻とれ土姿くれ
三才形も足試つてねて山も
富士もそくく三月七日八日
幸崎の妻も花をり籠もて
象沼の面也西旅々物も

宗濑
貞室
香吟
湖春
友静
信徳
芭蕉

かろりり南島のりけを傾く石 芭蕉

こころを成る事ごとくやうなれど川

持り葬の古跡若神の里

田一枚植くとき敷野のりれ

五月あにかりぬれや勢多の橋

芳野よりく

花さくらふあ日くらの船おちゆ

伊賀の園花畑の衣多そのかき大老良出

八重橋の料子謝りりく云傳くはれ

一里あまら花身老子孫のや

六月や衆は雲かゝりあり

淡ゆき月きへを浮舟を

子編の書あまひ入る右あ有様

月よがたけおとさきとさき富士

葉のまや本良あ古ま御達

棧や命哉のくむ舊うつ

早崎の周をえとやや啼く鳥

鳥さく鳥羽の田面やまの雨

隅田川あり

鳥帽子をく船吹のりかやら 其角

須磨の山よりよ何哉か人の言
ついでに編をよみ能く大井川
あふれぬをよみ能く大井川
嵐雪

形宮よりて

暖海中の沸きさく秋節乳
大弟や蝶のまきさく昔の月
北岩我や雨もあつて嵐の如
きこの山又あつていふ念丸より
太末

記伊のまき外故まで出来の呪礼を留めて
孝加一道の修理哉まき念丸ハそ老料足

ついでに秋のけしきよきつ男侍
清くささきを新坂や月節
言はれや廻廊十夜の明や夕土
カチぬへう、秋白や須戸秋
凍菘

越後より
人々て秋七つは冷しや
阿漭よりて

あふれぬをよみ能く大井川
木曾路より
心次も巴も昔の田植より
許六

八松や田さくら有く啼蛙 許六

宇津の山あり

十重子も小粒よかり秋の風

西川の舞やいみじく休田の大まゝ

装束つくろひきりかひ出く

くの高我かきくに開のくはるが 曾良

去崎和語に身ごとくし物かた

大いりわさの、雲の花衣采

如舟の浦

吾く川に映きくく片男波 弥吉

商人のひら舞きく高飛小 尺字
麦く川や内かもれお志賀の正 重こ

宇津

晦日もさびく乳母らわぬこが 尚ふ

道もくく多賀の鳥井の重く乳 舟象

去飛那や幾はるも乃る付雨 随友

か、崎やとあり合せく神くれ 友考

湖衣衣讀りさむは良能事 友考

歌あらしも軍あま出がりの心

煙籠やソク志る山彼も志

双林寺果阿弥少く

名月や橋をまへうら東山

支考

去那其二夜望田今や初雲

此坡

至橋もやむ川あはれは活のそ

古木

山方嶽の禁と通ぬ

引ゆや山をまうりて那らの雪

万子

在原幸少く

青帯も我肩をたぬ水は

と

玉水の空まで

山吹冬咲くく嘘をぬき名を

宛費

雑子心

枯芦や發波へは名をうら波
さきさきよつとけりや雪我のそ

安老の閑少く

雪の養子の脊中とくもさき

晚山

乃にまきまかへはゆやすみの秋

言水

橋をたむるもあまの一文宇

安川

きんくし疑子か答を鏡通

木因

す油の入りくも活りり好のふれ

調和

當麻りり

衣の文をうら織ぬ飛ゆし

その

木がりに吹風立や鏡山
巻坂や花の梢も車より
似合しむ谷子の一帯や須戸の里
八重葎も書きて見ゆる鏡田が

北枝
初月
杜國

不破の淵より

目利してつらふ者とも月見が

如行

小糸河京院の書物あり

堀竈よりひつらるる茄子乳

志水

道成寺より

すらの志のうま出るる花那

芝栢

雜十六

はしあきとあり入り

雲の書今の比敷ふゆとの丸

祝津

孫らうや暖味も浮世あは社

雲敷

名きくのそてハ雲織の鳥乳

其護

草かりは空と指の清水が

乙由

高野山院寺より

我目より素と刀くく涼さを

あつぬ火や浪の跡も書とて

智元

夏草のそりあは妹々涼う乳

免士

那谷寺より

今入る石も如りり秋の雲
 希岡
 せし立や海は一箱書あり
 雲裡
 信りり
 海を渡る可か夜舟の撞月
 麻父
 出羽大沼の浮島少く
 塘雨
 昔将へ引分る嘆つて

哀傷

人の方はうららみ哉
 白室
 雲のきりぎりすはさる夕夕那
 李吟
 比時とそらさるくく高れ
 人の子のこころ
 さと候傍に人もも葉みくま
 方山
 千子の方まらりもせめてまの許へ中をり
 芭蕉
 おだ人の小袖も今や古雨の
 りるまへよたへん流る友那が

塚も物け我あくあふ秋の風
 煙風り折ぬ出りて果て我
 意奈とつも焼ゆか煙う乳
 花毒負う方満うりて同く
 敷あつあつとれおりの玉まら
 出羽の品をう旅中よ死せし世
 當帰より表れぬ塚のすゝめ子
 養ふや編書ややれぬ桶の水
 妹の此まかりらん
 手の上は熱く消ふ螢う乳
 芭蕉
 支梁
 玄来

雜十七

中秋の夜猶子と送葬し傳うく
 加敷夜死月と見えより形と送
 孝下、妻より扶かれりと
 瘠れまよかえ冷ゆく北窓し
 子に扶くゆらこら
 似顔のあつと出く見え一輝
 母りあつとみきら子の名きこまら
 昔れ子やひらりや有秋の乳
 娘哉美なりき秋夜
 秋の語古よ落葉もはるもはる
 落梧
 尚ふ
 玄角

為哉我仲奇に蘇を敷時
 かねてをい立よかくまや枯尾迄
 旅りりく方まらきる人哉
 淡雪のともぬもあは消るり
 おき哉つてを
 此きや麻木の無も却れ
 我仲ちの塚とよりひきあつたき
 け下にくく眠るらん雪佛
 おこ子哉りくたひく
 雲の美と氣の遠ぬくうと先ん
 其角
 嵐障
 惟冬
 光雪
 末山

雜七

曲斐の鳥哉うとみく
 呼ああたたく雲のさうらぶ
 元妻はあふりまらうらに
 妻の中故投出しうきうれ
 妻よりあつれいさく人といひく
 かの親あつらうと重よ鏡が
 七月十日のりけしうら入り
 冬よ死め仙の中表御うれ
 人の子うとあひらに
 あと忘れ小瓜と尺び笑う舞
 其角
 智月
 荷弓

おとせのあまのつらげん

いさゝしや我をよき月の子 秋風

孫のあまのつらげん 三日のあまのつらげん

若我出づればのれを松の志 猿垂

末山々老母の死と嘆くとき子

昔のやうに秋さくらさしぬ 免黄

老母の力まらぬ夜

きふの秋よりをこころを秋に

芭蕉翁の忌中を七日くとうつり

さくくの昔のやけを移る言 支考

出羽の圖司をわらふは終りしに

死より事てその二月老花の時

病中にて死をせしめて

つらひく追めて死出の老れる 形坡

葉のまゝ子らるゝや一七日 種英

お年たつとむ

葉がたつとむ たつとむの 乙由

可風は没せし時

秋中へ入る葉あつてまき 文素

懷舊

高野ふりて

父母の志を承るに當り、終子の如

芭蕉

太田の社あり、実基の地也、

おさんや此の地の子に、

雲州高野ありて

夏子や兵しくも、愛子如

故を、蟬吟の聲ありて

さあぐの、牛背の山は、

雜二十

古のや、胸の鼓は、

暖のあり、小智のつる、

う、けり、や、休の子に、

朝長、

と、君才、

は、

己月、六日、大坂の、

吊ひ、

大坂や、

終吟

赤間、

は、

源亮

西行上人二百多首

連翹やその子れ日と暮るかな

胡及

亡友芭蕉居士近真山家集

風神女志とてれき被は追悼

此集を談誦也

念さや時あきあきの山家集

煮堂

芭蕉書毫下りて

歎とく孤そおこ秋如の歌

大坂討死已十四日

首とて冬二夜中へは妻お尋

許六

巻一

芭蕉翁三四首

月夜よ淋しうらけ残子うれ

海川芭蕉書毫近真山家

豆腐をとむりの歌や橋の妻

後戸の浦お男の塚みく

せて若く何そは海お田植時

支考

加賀の合呂守八光おゆ柳の起

庭掃く雪やちんちんおとつへ

その節お名跡もゆりく

青松書つて葉お秋もたあ

菓さねの母のひききよ海にまは 明水

色蕉菴に書き残る

すしめ小端流ひと跡やれ 曲翠

兼伊守の病よりあそ

笠提と塚を築く松や夕時 北枝

棠枯易地

大名の字は松老細うれ 三壽

高嶺下り

外の花は急房尺やうふ髪が 常長

市原野あそ

吾妻や小冊、背の尺事さ 約雪

河内親公存少く或房老をそ

何うんのさうらぬら見え

楠老鑑ぬうれ牡丹乳 其角

お掬老大磯り西ひと人形舟に

ようくく鴨老海やう八景亭を

つらねとやふ時

鴨老くあそおと何ふとち 三子乳

古戦場あそ

さかたの廻てあそ一葉が 乙女

手歴く友り何ふ

冬瓜や牛にのん秋歌のあり

古是は念の四十二足と踏こゝる

くもあけく串の傳らるゝら

衣れらる外も刃くぬ好きら

かくてうらがるはくうゆる葎

病中

ゆ燈の灯も刃く念もきんら

蕨立ちかやなくて葉こけけ

く此事の追ふまうく悔老輝

芭蕉

嵐雪

警水

秋歌

喚山

雜記一

秋歌の種も数人老公の那

芭蕉翁の塚よまふてく病身を押し

何突や塚より外より何さうら

雪もさう方の上哉鳴かすはが

家哉焚く

焼りき架せれも花冬数はゆ

鴨啼や弓矢を捨てく十三子

老武志と指やされん玉おれ

花黄くさる外物外月刃が

かろらる前へも話や妻の事

和及

大系

北枝

太来

正秀

手より心あまかきとちりて 新目

我身がよき病うまかき八巻ゆつと

此のうらと換成うらと

笄も根も好しやちりて 羽紅

秋の田やさからそとと秤二儀 尚白

変う方よ好風をう親二人 先黄

手庵を捨り出りて

消す耐も氷も消くはしと 路通

我の色も廓我出り風巾 大福

芳州さそ廓あさう九菜種さ 雲妙

雑北九

杜若の川乃ん中を伝かき 似雲

今も世成た好むりたや冬之 且葉

厚物まは夏の酒債と訊ひり 千那

杜若よりかきりて

身成替へふまは故衣の量り 言水

己斗の果れ乃に梅枝折り嫩

遠くは好いそしや花蓋 許六

初雪りて恨くあゝ心草 雲龍

四十程鏡の影かき重き好 朱林

折ふ巾三十まてそ夜守の林 八橋

ふかしく見ても静寂のうたせり 舟地
疾痛しつゝ病哉只つひりふおり
酒堂々三四息りあうりまはて

静果と音あかまてや仙あま

病後

死あけぬに日を経る己月れ 秋風

焼中病よあしきく愛徳あつ甥の

男あ方へやまきまぢ

舟よ死し歸せ見え替へるの案 支考

病中盆舎我いふれく

毫棚りし油火廻し我こく

認棚よあせりむく日城法が

鎌倉建長寺よゆめ

高葉うく方あつゆめあつてわれ 越人

ひとや釈よ念盤とがくし

たつの子あひ出せり

あま先の暖湯や冷ん湯のあ 嵐彦

三井寺の観きく智月とておひにあり

人の親子とらあはれりくかきれきれて

兄弟とつそそ親子とらあはれ 乙男

春くお色つを抄ふきのくれ
 ころくあか申信るは
 うきりよ世に芽を若く鳥の
 川流さうきるのまふひありた
 ちりて
 手よれ月見の友や若く春
 病中
 抄うきの急まふる雨の業
 可風
 除風
 白空
 此書

雑北七

贈答

信章お色つよりより春のりた
 ちりて 富士と若く 日枝の重
 杜國よりあか
 鷹ひの川見けるよりよりこ
 義虫の言我はよまき春の重
 長等川の氷橋より
 はあより自ら見たり物より
 涼き我若よりより春の重
 季吟
 芭蕉

吳淞臨江李由許入消息のさう
昼歎り登春せよその床は山 色無
その女うあめく

暖簾張子妻のゆりし老梅
子孫戸をたれや種葉子名は

露沾ふりく

西行老庵とありん花はを
涼しき冬指雪は足ゆり花は
秋の夜をともし菊しう咲りれ
やうりもん藜の枝は朱の白き

若手妻あつこ思くりてれまふ家か

おれは芳舎りやわくしきあつこく

芥一ふら松笠りえを月夜 去芳

芭蕉翁とあまうらんつ勢く

りあけしきふら村ありまのあけ 斜哉

文りあ子老切で渡きり 文字

翁老七のくしりりあきれき

於無名庵り偶あしき公地まへ

まうまふまふうかんやましり

朝妻や茶碗の後に茶端

うー

船乗や人冬つんき暮るり 志未

信見方の筑紫とらとらした

ちり井く一細の風あまひ

虫ありきと支考にあひて若柿舎の

半あやたつてうれりりり

鳥方虫殺り同き入暖暖の

柿

返

柿々の種分かえり様森が 支考

馬の口取らる男の部にも栗穉とて

り始伝やと尋ねりれと

外少き雲の粟田や比叡の秋

神風鍬半成り厨り結あり机と出り

吾心ふれりりり子の高 木因

幻位産哉訪ひく

木啄の杓をつくく位我うれ 曲嬰

芭蕉の為や取ぬく

我り喰を椎の木とあり友本左 免黄

さくせきく菊やわくく夜

某事と死旅奈く妙極と若也 如行

於り候る隱憂より中をき

焼火より馬木山野炭くも吹け 千八

為り候る先く遊むる候

雲霞より冬木の梢う乳 高川

亦あふ人より中をきけ

一夜より三升寺より神くれ 尚公

とも哉翁を遊むるきく

涼風も出ましく遊み候 遊刀

将老田との子鹿より入るに候

りぬる支替ひつく時ぬ乳 壯年

伊勢の涼菫より草庵を遊れ

萩苔の友を遊ばせしき 舎翁

将老木枕のうらむを遊み候

帰るると草庵を遊み候

山村野亭の枕より新木の節を遊

木枕の垢や伊吹より遊み候 文字

こゝろ

夢に又もて蘇る神くれ 将老

手強き娘よりあふ候

あ神下りた何とあふ候

曲翠の梳篦を訪ふ湖水と背ひ出
 連やあふと表衣た起しん 乙雨
 小枝交手をとりやうとて
 かの袖と袖の尺をさるる露葉 句堂
 之
 夜着ひくく此神ハあり 墨火燈 北枝
 情多うり 太周の若哉法くまうり
 家ありその雨りまのうら
 千巻水くやむく 産妻の待らんか 飛坡
 訪深者不遇

雜北一

倉洲を袖味唱の谷おいとん 程己
 相志りり女帝の這住ふおらにや送る
 萩萩も疾くころ中そ女帝心 後君
 洛中衣出林掃ゆる梳篦をさす哉
 越の梓仙より可れく
 後意者名掃志川く流るる花 乙由
 涼巻く糸巻と熟く
 空の白り二人をく火ハわと海 免士

画讚

三聖入像

月花のまはりやほろこのあけり達

色蕉

風音の画くは後予りんせ

形骸あ下子のあきへんああり

正感像後鐵肝石心此人之情

持子よりかふ泪や楠水衣あ

小所画讚

まきやきあらし日と心表と笠

雜此二

盤鉢よりくあまよる像り

意りくあふらん人のりあつま

布袋の讚

おのりやほろ中月の花

顔あらしあけける像り

あけあけあらしあけあけあけ

扇あらし

あけあけあけあけあけあけ

毛角

扇あらし

傘あらし月あけあけあけあけ

寒山の談

度々思ふにいとく雲のく食ぶ

之論

芭蕉翁の縁の談ニ句

月心の外より月乳支那の乳

形披

軒し涼川より冬筆まきこころ涼ん

ははけし死とありし我昔ひ出く

冬籠まきあそむ角や糸くえ

裸子の談

とこころ子と物忌もわらん瓜一ツ

と考

大石山の強り

雜世三

せくさ北風高きなり山さかろ

嵐雲

小町の談

我悉く同じ鼻もかま花の色

持女の強り

この方を持たせりあつて筆おろ

先貴

吾邦小紫々染弦よ

懐り歌すか夜衣夜衣乳

立吟

亡跡の画像と多つらう写し那坡可

送る涼川の庵の什物よ寄附を

笑の裏世言の耐強さうこが

許六

葉子東下りの弦り

け平好く先瑞はるやき終重

木因

八重を去る屏風の画り

奥更なる秋の多し一月見舟

舟水

坊多の橋を去る扇り

橋多下りしを去く扇の秋

北枝

穀骨の讃

さくくし乳扇の骨や秋の風

乙由

許六々々の弦り

け君の替りしを去く扇の秋

老士

雜世四

乙神繪賛

松り梅雲衣社多同走とも

後河 白隠

蜀士の襖

六月や日本子心山山

巴静

三保の松系の弦襖

涼くさ装束と御りて三保の橋

巴筑

詩哥

非路山を法系の句に西行上人の詩に於て

何の木も花もさしたる白ひく乳 芭蕉

七夕の夜風雨ふけりしりり小町君

哥女類く〜く

高水より早も旅亭や名の上

范蠡も長男の公女に於て山家集の歌子

あらふ

一露もあゆまぬ葉か名水と那

花下忘帰因美景の公女

春入ふは物引も巻もさふ北下 飛水

夜来風雨後秋氣颯然新のつと

秋の西も風もさふ入るも新

就中断腸是秋天のつと

雪の旅もあつてはかた好者定

一鳥不啼山更幽の公女

木の香ひもさつたつて葉山子が 凡兆

馬頭初見采叢花のつと

熊谷の境よれをけり老花 許六

釋教

七教急り南世河原院外なり

守氏

殺せ戒

蚤故とも殺さく教せ日々ん

貞位

本教寺あり

約風り何そ自力老腐り

宗因

丈六のかけろ不高し石の上

色蕉

或智識示て曰ふま禪大惑のいひとや

結書りきよくぬ人かをさき

雜世七

寺に在り誦教あり月見あり

明照寺にありりるそのつ後の信公の横と

号とくは度やはくちふお紫

縁取くちの同姓及此うれ

不卜

世常迅速

咲つちの川原梨茶子の細うね

傘下

高節あり

数花の繁きちまり雲の流

杜國

春の教ハ詩の初能の堂筆

香良

端川も弥陀多文らかりきい

玄樹

尼寺のうら菜のふれちる徑 言水

法隆寺の南無佛の太子を辨む

淨袴のとうれあひうゝあのみふ 千那

内秘菩薩行

夕立り踏ふえへそりうみ

燈の葉の後り葉うく乾仁玉水 松芳

皆そそ吾子

似我燈のあぬ子とあま彼存 治位

普れり刺殺せし時重穉ま

形儀をせきまは子あら夜の月 文子

雜世八

けり畑や敷きつりまらて仏在世 小物

薬と品如子得母

休立ちく吾てころつく大角豆が 胡及

同如病得醫

かろく時清水乃身敷山路り乳

去如せりく若光寺必来用帳の時

涼くそ那山より山ふしを仏が 来集

呪礼の時

後摺り卯の念き都一初集山

故物そとの中に声あり念佛後 来山

一切衆生悉有佛性

盗人老婦抄く言のやせり

末山

前業所感

身や猫の爪く因縁

西吟

薬草喻品

百子やひひりる不番の中

柳徑

無懺愧

深縁深縁うれりる傍り

落梧

深着世界無惠心

つて先と執りて火焼く

嵐雪

雜冊九

煩悩ありて衆生あり

骸骨の上は粧く花見り

鬼黄

焼く火より灰もきせて云は

修羅道

ゆくは切ちりる西風

百里

人道

文うらたて我恨くや生此

一憂心地り筆り

牛に如る念点を如素々

反考

念をり花啼く夕ぐれ

飲酒戒

休の樂のさしやまじやきのれ

匠

殺生戒

いづれとの虫は命を凡ゆる

法花八講の侍りに女房の徳阿所と

笑へくは茶と八雲晴と交ぬ糸

魏女成佛のありしうりて志のいあへ

鼻うむ音のしりれ

ほろくともる洞や蛇ま玉

哉人

三鬼無安猶如火電

雜四

六月のけぬらひ若ら巻く糸

草木國土悉皆成佛

を柔や捺挿るゝに佛を

丹坡

隨縁真如

けむらう照らしてあまの魚

丹野

滋養龍のいみ

青砂を糸編まのま敷その耐

木原

絆の子ら木筋とくろは法阿が

ト枝

赤地光明とてふと

小服筋よひうら試やたも玉接

糸と

地獄

せりりすてひやくさやぶる

乙

法巻上人

常念ふつらふれま鶴くれ

氣録

死科のまらくさるや古扇

暮由

昂方御佛

夏陰のまきふはんの佛くれ

忍意

呆らふれ仏の道り落葉く

蓮之

妓とちりき

尺達の髪は梅ゆりまひれ

若肉

畜生道

鶉かき口まはしてあきらめまが

乙由

六月の末高野山よりとらきた

初花つばまきも浮世の道まが

隠吹

三尊唯一心

至生らや蔓一まらかむんまら

千代

不樂圖浮提濁悪世

けりまむ居いれまら麦埃

蝶友

神祇

法物も是も聖物のきとくは 貞徳

伊勢少くは伊賀と人老道公と行

たまひく事我らひ出く

禊水も清く起さる木の嵐も 五蕉

二尺の圖式おと伝らる

うさうお乳飲の花も浦老春

葵田の社由修成有り此

磨古の鏡も信く一雪も老忌

鳥林の禁と通る

狛乃くくはよゆり神の歌

船身や言さる神も出やに 明水

子乙女の足よりく迄の鏡も 言水

とんくと物ちらうの歌も火が 荷弓

乙の若くして

同身もいさ秋の色も鏡も 方山

常も水あひて事も神の物 龜洞

伊勢は楽

青海も老く老の巻れ一つは 許六

仁者法樂

月花より止りき下女の鏡うれ

念ふに面も神は非密身

妻の考やゆきの跡乃炭の切

又先づらの社よりあをたつとく

夕立や田も元々らの神あり

換彼の坂本結を非は雨をととくと

神風の雨も白へ夏も名子

元日は法沙同多しぬ神代

庭まけ庚申の夜も春ぬれを

三

神

文字

角

除風

淡石

涼菴

雜四十三

庚申やこゝに火煙の育は者

休の子やま川地奈の二はら

冬きしや神宮の抱とら神つ

佛より神をもとくた今時の春

非枚やきれけは君は梅の色

つれ立ちく羽屋廻り燕うれ

夕立や曇も海く神ま

残兵

高川

落指

と免

我黒

如象

乙由

備中若備津宮

後のまもまふと津登の山ひ上

元

祝

夏哉祝ふ

後り今秋中ふらふらんしの松

季吟

知是の勢也

とたふや将ともふ春丘の葉

芭蕉

志もかく水底らん入り

先祝へ書をおる冬冬草り

乙物共老りて

人よ家と笑せて我多しうん忘

雜四十四

赤串の毎七十何なり七の秋七月七日

こゝろたまきらん万葉集七巻と歌と

七株カ名萩のよ本や軍の秋

是橋、刺髪へ醫門を賀ま

初年に松の刺し歌の那

武士のよみせ長哉祝ふて

筆の耐らうとす一弓の中

去来

字をく非穢うらむらん入を賀ま

花をよ買も咲縮子多し非の梅

千げの秋白ひよきりしとく米

龜洞

於へ字同りうらまぬ儒士の子
 本心およみある相の毛茸あり
 駒指ぬやしく人我はあはれ
 時とて犯さぬるよ秋まは
 武家の家督お渡り有る様候り
 終書は接種の上儀も本心は
 姉と弟と二人の少ゆゑ人子
 小川ゆゑに難うあへる懐を
 百姓の子を二男三男とれく
 仕居るる日と備へに

落葉荷葉敬らへるの家名は
 荷弓う四十の巻うり
 我妻と外そのまに足あられ
 紀伊大村の何りし商家の祭場我は祝く
 松つねくうの島くも川縁
 人の皆礼哉いふふく
 日外根まかひうり孫まき
 三ツ木や秋花り付安ん園の花

書林
 聖勝

安永三年甲午三月

書肆

西村源六

西村市郎右衛門

井筒屋庄兵衛

橘屋治兵衛

梓行

蝶夢子書述目錄

芭蕉公羽發句集二冊

去來
大艸發句集二冊

同懷中小本二冊

名所小鏡 三冊

類聚發句集五冊

蕉門他端語源二冊

芭蕉公羽文集二冊

松島道如紀一冊

同他端集 三冊

新類題發句集五冊

龍口名源發句集

三冊

宰府紀行

一冊

辨

字々

一冊

芭蕉翁繪圖傳

二卷

古聖の冬紀

一冊

袁克澂日記

一冊

遠江乃記

一冊

蕉門書林

寺町通二条下凡

橘屋治兵衛版行

